Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>原著 : Leon Battista Alberti, De re aedificatoria 訳書 : 相川浩訳, アベルティ「建築論」中央公論美術出版, 1982年11月
Author(s)	向井, 正也
Citation	デザイン理論. 1983, 22, p. 122-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52567
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

原書：Leon Battista Alberti, De re aedificatoria

訳書：相川　浩訳，アルベルティ「建築論」中央公論美術出版，1982年11月

待望久しき，イタリア・盛期ルネサンスの巨匠アルベルティの建築書の，単独の訳者による，本邦初の，直接原典からの全訳がようやく日の目を見た。まさにモニュメンタルともいえる歴史的な訳業の完了である。この翻訳に用いられたテクストは，ジョバンニ・オルランディの校訂本（ラテン語とイタリア語の対訳）〝L.B.Alberti, L'Architettura,(De re aedificatoria)Testo latino e traduzione a cura di Giovanni Orlandi, introduzione e note di Paolo Portoghesi, ed. Il Polifilo, Milano, 1966.〟で，これは今日入手出来るもっとも確かな定本といわれる。本書はそのラテン語原文からの邦語訳である。訳者多年の御苦労に対して，まず深甚の敬意を表したい。

レオン・バッティスタ・アルベルティ（1404～72）は，フィレンツェの産だが，同じくフィレンツェ出身の巨匠たちとは異る新しい建築化のタイプを示すものといわれる。ルネサンス第2世代としての彼には，初期の巨匠たちのような地域性は見られず，より広い視野をもつ古典主義的コスモポリタンであり，単に建築の世界だけに止まらず，同時に他の多くの文化諸部門にも精通した，いわゆる「全能の人」〝l'uomo universale〟だったといえよう。それ故建築家としては，N・ペヴスナーもいうように，「彫刻家・建築家としてのブルネレスキやミケランジェロ，画家・建築家としてのジョットーやレオナルド・ダ・ヴィンチなどの場合とは異なる，いわばジレッタント建築家」として，「水際立った騎手であり，運動家であり，……その機智に富んだ会話も有名であった。劇を作り，作曲をなし，絵をよくし，物理も数学も学び，法律に通じ，その著書は絵画や建築は勿論，家庭経済にも及んでいた」(「ヨーロッパ建築序説」小林文次訳）事実，アルベルティはまず「家庭論」を1432年から書きはじめ，1434年より2年あまりフィレンツェに滞在中に「絵画論」，「彫刻論」をものしている。彼がこの，いわゆる「建築十書」に着手するのが1443年，その後一時中断の後，1447年より第6書から再び書き初めて1452年一応の完成を見たが，その出版はアルベルティの死後のことで，1485年フィレンツェで初版が出されている。(なお詳しくは，本訳書の巻末P.359頁を参照されたい）訳者が最初よみはじめたというのがこのフ

ィレンツェ版なので，もはや今から20年もの昔，昭和38年（1963年）頃のことである。ちょうど訳者がA・パルラーディオの研究に一段落した直後とかで，各国には既に近代語訳があるのに，日本にはないのが不思議と思い，この訳業を思い立ったと聞いている。

ところで，甚だ唐突ながら，本書のタイトルがアルベルティ「建築論」となっているのがまず気にかかる。訳者に，何故「建築論」なのかと問いただしたところ，これは出版社の方でつけたとのこと。そういえばアルベルティの「絵画論」が三輪福松訳で同じ出版社から既に出ているので，そのタイトルにならったものだろうが，何とも心なきわざだと思う。アルベルティはこの書を古代ローマ時代の建築の教本として有名な「ウィトルーウィウス建築書」〝De architectura libri decem〟の写本に基き，古典復興の意味からも，それに代る近代の，より完全な建築書を書こうとしたことは明らかで，内容的にも両書は，たちがたい強い絆でむすばれている。そしてそのことはちょうど，ウィトルーウィウス建築書の本邦初の，そして唯一の完訳者としての故森田慶一博士と，アルベルティ建築書の訳者としての相川浩博士との間の，切っても切れぬ師弟の関係と相似なのである。訳者は本書の「あとがき」の中で特にこの点にふれているのが注目される。「終りに謝辞を述べたい。それは学統を示すことでもあろう。京都大学名誉教授，森田慶一博士からは，ウィトルーウィウス建築書のご研究を通じて，ちょうど古代ローマ建築とルネサンス建築の関係のように，常にご指導，ご鞭達賜わった。それ以上に恩師として，建築本質への直観の厳しさをお教え戴いた」

このようにして，本書は，ウィトルーウィウスの建築書と同様，その内容は本質的に教本として技術全書的なものなのであって，目次からでもわかるように，いわゆる建築十書であるところからも，「建築論」ではなく，あくまでも「建築書」，それもアルベルティ「建築書」ではなくて，これも森田博士にしたがって「アルベルティ建築書」こそが本来正しいタイトルだと考えられる。これについては少々長いが森田博士の「ウィトルーウィウス建築書」についての記述を是非お目にかけておきたい。「この書は，……architecturaについての書である。architectura はふつう建築または建築術と訳されているが，古典古代にあっては，それは「諸技術の原理的知識をもち，職人たちの頭に立って制作を指導しうる工匠の術」を意味した。そこでこの書は，単に建築術だけでなく土木技術・機械技術・造兵技術など高度の知識を必要とするいわゆる大技術一般を含む広汎な技術の書である。しかもそれら諸技術の基礎となる自然学的知識をも網羅したいわば大技術の全書ということができる。そしてこの大技術の中心的位置を占めているのがわれわれの言う建築なのである」（傍点筆者）本書が基本的にになう全書的な性格は，これといささかもかわるものではない。とはいえ，このことは本書の核心ともいえる建築論的な部分，すなわち古代古典以来

のヨーロッパ的伝統としての厳しい古典主義精神に貫かれたアルベルティの建築思想の本書における重要性を毫もゆるがせにするものではない。

そうした古典精神の純粋結晶のような一節、いわゆる〝Classic Passage〟は，本書の第6書第2章におけるアルベルティの美の定義にもっとも端的に示される。「美とは，特定の理論的方法を伴った，あらゆる構成部分の均整であり，劣悪化なしに，それらの部分の何一つ増、減、あるいは移動出来ないものである」(P.159 訳文のまゝ) 同様の精神はまた他の箇所，例えば第9書第5章（P.283～284)においても示されるが，尨大な頁数のなかで，ともすれば見過しやすい，古典の造形精神の，聖書の一筋にもたとえられる，これら建築論的に重要な部分を読者に把握させるために，訳者は註においてそれぞれの箇所の原文を引用することで明瞭に示している。また一方，技術史的な興味をもつ読者のために，訳者は関係記述をさがす便宜を考慮して，巻末に「内容詳細目次」(P.364～367)をわざわざ作ってくれているのも行き届いた措置だと思う。

古代古典の建築書から近世ルネサンスの建築書へと，西洋古典学の二大著書の，師弟二代にわたる訳業は，頭書のように，モニュメンタルという語にふさわしい壮挙であり，それだけに，あえてこの途方もない仕事に自らをひき入れた訳者の心構えには当初ただならぬ気配が感じられた。まるで修業僧のように早朝3時に起きて，学校に出かけるまでの時間を，訳者はもっぱらこの訳業に専念すること実に20年に及んだのであるが，前述の1485年のフィレンツェ版（フィレンツェ国立図書館蔵の原本をマイクロフィルムに複写）の飜訳は実に難渋をきわめたものであったようだ。「どうがんばっても一日数行ほどしかすゝまない。一体いつになったら終ることやら。ひょっとすると一生かけても出来ないかも」といった風な悲観的な言葉を訳者から聞いたような記憶がある。

この初版本にひきつづいて，訳者はさらに1512年のパリ版も入手しているが，「両書ともラテン語の語尾を略号で書いているので，それが判らずに困りました。そこで，両書で組活字の位置が違う場合，略号を用いず，全部語尾変化を活字に示しているものがあり，それを探し出して対照表を作りかけたこともあります」初版本の飜訳についての苦心の程を訳者は，筆者の問いにこのように答えたが，まったく筆舌に絶する難行苦行の連続であったものと思われる。それゆえ，たとえ20年近い歳月を費したとはいえ，比較的限られた期間内に，この訳業が完了を見ることが出来たのは，訳者もいうように，もっぱら頭書のテクスト，オルランディ校訂本によるもので，訳者はこの本の1966年の出版後「すぐに入手して第1頁から完訳にとりかかったと思います。それ以前は，要所の訳，抄訳でした」と述べている。この訳業が一応完了するのは，1980年，出版事情の悪化のため刊行が1982年11月と，かなり遅れたが，この間訳者は訳文に目を通し誤訳に気付いては修正をくりかえ

したとのべている。

訳者はこのオルランディ校訂本を大変高く評価しているが。それでもなお，これによっても問題はあったようで，筆者の問いに対して，訳の苦心として，まず「建築技術用語はまだ西洋建築史の和訳で定着していない点が多いので，新しい造語に苦心した」また，「建築論としての重要な用語は，近代語訳からの重訳では誤解の危険があることを実感し，結局アルベルティの用語を全部拾い出して訳の統一的，全般的解釈を試みた」など，人知れぬ苦心の程を語るのだが，元来飜訳というものは，普通の場合でも「よく行ったところで只錦の裏を見るに過ぎない」（岡倉天心）といった風な性質のものであるのに加えて，特に技術書の飜訳でいい文章を望むこと自体が，どだい無理な話なのである。かつてこの道の先達，森田慶一博士は，前記ウィトルーウィウス建築書の最初の訳（1943年12月，生活社刊）の冒頭，訳者序のおわりに，次のようなことをのべている。「飜訳の出来栄に就いては今更訳者の文筆の才に乏しきを遺憾に思うのみであるが，もし言い訳が許されるならば，ウィトルーウィウスと共にNon enim de architectura sic scribitur uti historia aut poemata.（5，序，1）なる言葉を以てそれに当てたい」このことは，建築の記述のあり方は，歴史（物語）や詩とはちがった性質のもので，それは本質的に読者を惹きつける魅力に欠けているということで，その理由として，これにつゞけて，「なぜなら，（建築の書物では）技術本来の必要から採用された語彙はふだん使っていない言葉なので意義に暗影を投ずるからである。それ故，これらはそれ自体として明白でないだけでなく，その名称も日常は一般に出て来ないから，あちらこちらと広い範囲にわたる教本の記述は……言葉が繰返しと過多のためにこんがらがり，読者の不正確な思考を形成することになる」とのべている。ウィトルーウィウスによって代弁されるこうした技術書本来の記述上の困難さの，さらに飜訳による一層の増幅を考える時，一般に西欧古典学の歴史的大著の訳業の難渋さ加減が今更のように痛感される。そうした意味で，この訳業の完了を，おそらくは危惧の念をも交えつつ，最も心待ちされていたのは，他ならぬ師の森田博士だったろう。ようやくにして出版にこぎつけた本書を携えて，取るものもとりあえず訳者がはせ参じた時，先生は既に死の床にあったが，本書を献ずる訳者に対して珍らしくも握手を求められたという。あとにもさきにも見せたことのない博士の最大のよろこびのゼスチュアだったと思われる。ここにわれわれは，関東には全くその類を見ない，西洋古典学研究の，森田慶一博士を頂点とする，いわゆる「京都学派」の学統における輝かしい一つの成果を見るのである。

それにもかかわらず，否それだからこそ，私は訳者に，失礼とは思うものの，ここで一つの注文をつけさせていただきたい。これもまた先達，森田博士のウィトルーウィウス建

築書の訳業をかえりみてのことなのだが，博士は前述のウィトルーウィウスの言葉をかりての「飜訳の出来栄えについての言い訳」をした戦前の訳書につゞいて，戦後全く面目を一新した，言い訳なしの新訳を行っている。（東海大学古典叢書，初版1969年）いかにも古典建築学の学究にふさわしく，前記アルベルティの美の定義ではないが，「おしもひきもならぬ」もの事に完璧さをねがう，いわば完全主義者としての博士であってこその，このような新訳，いな完訳であったと思われる。そこで当然のなり行きとして，私は訳者にもまた，将来アルベルティ建築書の，渾然とした新訳を是非ともお願いしたい。ラテン語もイタリア語も何ら解せぬ筆者ごときが，こんな事をいうのは甚だおこがましい限りだが，正直いって本書の訳文には，まだまだ推こうの余地が残っているように思われる。何としても，アルベルティの名においても，訳業の完了ではなく，完成，完訳を期していただきたいものである。そしてその場合の書名もまた，森田博士にしたがって，アルベルティ「建築論」ではなく，どこまでも「アルベルティ建築書」にかえていただきたいことをつけ加えさせていただく。

次に本書の内容を紹介する段だが，私がこの「書評」をお引うけした意味からは，すこしワキにそれるので省略させていただきたい。そもそも私はこういう書物を批評する資格など全くもち合せないので，はじめにお断りしたのだが，本来の意味での書評ではなく，コメントのようなものでもいいからというので，それならと，潜越ながらお引うけした次第。当然結果的には，何ともかっこうのつかぬものになってしまったが御寛恕のほどお願いいたします。

（向　井　正　也）